

# スラッシュ・リーディングを用いた速読指導

長期研修員 石澤 竜 義

Ishizawa Tatsuyoshi

## 要 旨

限られた時間の中で英文の内容を速く理解したり、多くの英文を読んだりするためには速く読めることが必要となる。スラッシュ・リーディングにより文頭から英文の意味を理解する速読指導を行うことによって、読解速度、読解効率、意識に与える効果について研究した。

キーワード： スラッシュ・リーディング、読解速度、読解効率、意識の変化

## 1 はじめに

平成21年3月に告示された高等学校学習指導要領における外国語の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。」ことである。

しかしながら、英語Ⅰ、英語Ⅱ、リーディングの授業においては、訳読式による内容理解が活動の中心となることが少なくない。訳読式の授業では、生徒が返り読みをして一文一文英文を日本語に直すために、時間がかかり、他の言語活動ができなくなってしまう。また、授業の中で英文を読む量も少なくなってしまう。

こうした問題を解決するには、生徒が英文を速く読めることが必要になる。それにはスラッシュ・リーディングを用いた速読指導が有効であると考えられる。本研究では、意味単位ごとに文頭から順に内容を理解するスラッシュ・リーディングを用いた速読指導を行うことによって、生徒の英語の文章を読む速度と長文に対する意識にどのような効果があるか検証したい。

## 2 研究目的

文頭から意味単位ごとに英文を読む習慣を身に付けるために、スラッシュ・リーディングを授業に取り入れた速読指導を行い、生徒の読む速度と長文に対する意識の変化を検証する。

## 3 研究方法

- (1) 先行研究による速読指導とスラッシュ・リーディングについての研究
- (2) 置籍校におけるスラッシュ・リーディングを用いた速読指導とデータ収集
- (3) スラッシュ・リーディングによる読む速さと英語の長文に対する意識の変化についての考察

## 4 研究内容

- (1) 速読指導

## ア 速読指導の意義

授業の中に速読を取り入れることで第1～4のメリットを挙げることができる。第1に、限られた時間内に読みの量を多くすることが可能になる。第2に、訳読式では一語一語、一文一文の意味を理解するため、読み手は段落の主旨、文と文の関連、段落内の構成などに注意が向かず、文章全体の内容理解には至りにくい。一方、速読では細部にこだわらず、段落ごとの要旨をつかみながら読み進めるので、文章全体の概要を把握することができる。第3に、授業の中で速読を取り入れて内容理解を行えば、内容理解に要する時間が短縮でき、他のコミュニケーション活動を行う時間が生み出せる。第4に、大学などの入学試験における長文問題の対策になる。

## イ 読解速度と読解効率

一般に読む速度は1分間に読んだ語数wpm(words per minute)で表される。読解速度は、〈読解速度(wpm) = 総単語数 ÷ 読みの時間(秒) × 60〉で算出される。しかし、読解速度の数値が大きくても内容の理解ができていない場合がある。理解という要因を伴わせて実質的な読みを考えるならば、読解速度に内容理解を問うテストの正答率を掛ける方法がある。読解効率は、〈読解効率(wpm) = 読解速度 × (正解数 ÷ 問題数)〉で算出される。(門田、野呂、氏木、2010)

## ウ 日本人高校生の読解速度の目標

読解速度については、岩城(1980)によると、「目標値としては理解度70%で、大学生で200wpm、高校生で150wpm、中学生で100wpm位がほぼ妥当である。」としている。また、谷口(1992)によれば、「教壇に立った経験から日本人高校生の読解速度の目標は150語位で、その際50～60%の理解度を目標とするのが妥当である。」としている。門田他(2010)は「日本の高校での英文の速読指導においては、およそ150wpmを読解速度の目標として、理解度は60～70%程度を目指すべきである。」としている。以上のことから、研究により理解度に多少違いがあるものの、速読指導における日本人高校生の読解速度は理解度60～70%程度で、およそ150wpmを目標とすべきであると考えられる。

## エ 速読指導に関する先行研究

山内(1985)は中学3年生146名を対象に4か月間に20回速読指導を実施した。30～40語に1語の未知語を含む100～250語の教材を用い、読み手の読解の方略の変化も調査するために振り返りをしないなど読み方に言及することなく行われた。英語の学力により上位群(44名)、中位群(58名)、下位群(44名)に分け、中位群が速読指導前後のテストの比較で最も大きな伸びを示し、読解効率が65.9wpmから177.2wpmへと変化した。藤枝(1986)は大学生を対象に1回20～90分の速読指導を半期で6～15回実施した。逐語読みをせずにフレーズ読みをする、1度の目の停留で読み取る語数を増やす、推理力を働かせて読むなど速読力を伸展させる方法を詳細に説明し、速読指導の最初2、3回には目の動きを活発にするための文字・単語識別訓練を併用した。訓練で読んだ延べ語数は8,000～10,000語で、5年間にわたって実施された472名の読解効率の平均値が78wpmから128wpmに向上した。駒場(1992)は栃木県内5つの高等学校の第1、2学年155名を対象に1か月間に20～30分間のコンピュータを使った速読指導を10回行った。フレーズ読みのルール学習を3回した後、速読練習4題を7回行ったグループは読解効率が平均17.3wpm向上した。また、フレーズ読みのルール学習はなく、そのルールに従ってあらかじめスラッシュを入れた英文を用いて、速読練習4題を10回行っ

たグループは読解効率が平均16.7wpm伸びた。

## オ 本研究における速読指導

目的に応じた速読として検索読み(scanning)と概略読み(skimming)がある。検索読みは必要な語句や情報のみを捜す読み方で、概略読みは重要な情報だけ見つけだし、全体の概要をつかむ読み方である。本研究においては、検索読みと概略読みを除外して、教室における内容理解を伴う読みを重視し、文頭から意味単位ごとに理解する速度を向上させる指導を速読指導とする。

## (2) スラッシュ・リーディング

### ア スラッシュ・リーディングとは

スラッシュ・リーディングとは英文の読解速度を向上させる指導方法の一つであり、意味単位ごとに英語の語順のまま読む読み方で、フレーズ読み、チャンク読みと同義である。

### イ スラッシュ・リーディングの効果

チャンク読みの効果について門田他(2010)は、「文頭から英語の語順に沿って理解すると、振り返りもないために処理時間が短くなる。チャンクごとにまとめて理解するため、一語一語を覚えるよりも記憶への負担も少ない。」と述べている。またフレーズ読みの利点について谷口(1992)は、「①1回の固視で多くの情報を得る、②ストーリーを覚えやすい、③ストーリーを思い出しやすい、④語やアイデアを推測しやすい。」と述べている。こうした研究から、振り返りがなかったり処理時間の短縮による読解速度の向上と内容を記憶する負担の減少がスラッシュ・リーディングの効果と言える。

### ウ スラッシュ入りの文章を読ませる理由

門田他(2010)によると、「一語一語から一句一句と1回の固視でどれだけ多くの範囲の文字を読めるかといったカバー率が広がったことが、読みの速度向上の原因となることが理想であり、1度で処理できるチャンク単位を広げることによる速度の向上が、理想とする速読指導の目標である。」としている。あらかじめスラッシュを入れた英文を読ませることはかえって意味単位を広げることには制限を加えてしまう可能性がある。しかし、駒場(1992)によると、「第2言語としての英語の学力が定着していない中級、初級レベルの高校生においては、初めからスラッシュで区切っておいた方が読解効率の向上に効果的であった。」としている。これを参考にして、スラッシュ・リーディングを行う際に、読み手自らが意味単位ごとの区切りに目でスラッシュを入れて読み進めることが望まれるが、本研究では、対象者が高校2年生であることを考慮すると、意味単位ごとの区切りを見つけることがまだ困難であると考えられる。また区切ることに意識が集中し、内容理解が不十分になる可能性がある。そのためあらかじめスラッシュを入れた英文を用いて速読練習を行うことにする。

### エ スラッシュの位置

高梨、卯城(2000)は、「フレーズ読みには具体的にフレーズに区切る箇所について指導する必要があり、そのルールを①挿入箇所の前後、②『前置詞+名詞』の前後、③『to+動詞+目的語』の前後、④接続詞の前、⑤疑問詞の前、⑥関係代名詞の前、⑦長い主語の後、⑧長い目的語の後、⑨場所や時間を表す副詞句の前後、⑩句読点の前とし、更に必ずしも機械的に区切ることができるものばかりではないので、文脈に応じて柔軟に対処する必要がある。」と述べている。本研究では、対象者が高校2年生であり、一定の文法事項を学習している。スラッシュを入れる位置については諸説あるが、理解可能と考え、このルールに従っ

て指導する。

### (3) Nuttallの循環

Nuttall (1996) は、「下の図1、図2のように読みには悪い循環と良い循環がある。読みにおいて速度、読みの量、理解度、楽しさはお互いに関連しており、それぞれの循環におけるいずれの要因も他の要因の原因となりうる。良い循環では、速い読み、多読、よりよい理解、読みを楽しむことと循環し、相乗効果を生み出す。しかし悪い循環では、遅い読み、読みを楽しめないこと、少読、理解できないことと循環し、すべてに悪影響を与える。」と述べている。このことから読みの速度を向上させることが読みの楽しさを生み出し、英語の長文を読むことに対する意識の変化に効果があると期待できる。

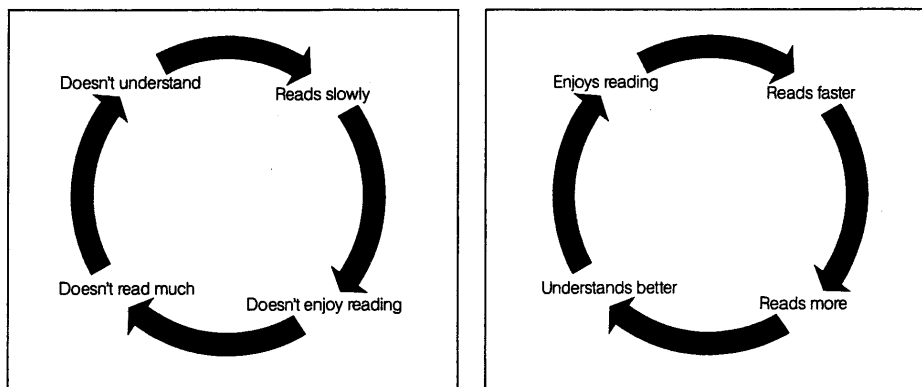


図1 The vicious circle of the weak reader

図2 The virtuous circle of the good reader

### (4) 速読指導の留意点

限られた授業時間の中で速読指導だけに使用できる時間は多くない。短時間で行える速読指導であれば、あらゆる高等学校で実施することが容易になる。高梨(1995)によると、「未知語の割合が5%以下であれば英文の意味がおおよそ理解でき、文脈から未知語を理解することも可能である。」としている。これは速読指導行う際英語の文章に含まれる未知語の割合の基準を示している。未知語の割合が5%を超えると、文脈からの類推が困難になり、内容理解を伴う速読には辞書などを使用することが必要となる。これらの問題を解決するためには速読指導に適した教材を新たに準備する必要があると考える。

### (5) 仮説

以上のことを参考にしながら、本研究における仮説は次の2つである。

仮説1 スラッシュの位置を指導した後、授業の最初に意味の区切れが理解しやすい教材を用い、スラッシュ・リーディングの練習を重ねていけば、生徒の読解速度と読解効率が向上するだろう。

仮説2 生徒はスラッシュ・リーディングにより英語の長文を読むことで、英語の長文に対する抵抗感がなくなるだろう。

### (6) 実施方法

#### ア 速読指導の対象者

本研究の対象者は奈良県立高取国際高等学校国際英語科の第2学年78名（男子32名、女子46名）である。この中から速読練習実施前のテスト（以後pre-testと言う）、実施後のテスト（以後post-testと言う）のいずれかを受験できなかった生徒、速読練習を6回以上欠席

した生徒、1年以上の英語圏での滞在経験がある生徒、および留学生は分析データの対象外とし、最終的な分析データの対象者の数は73名（男子30名、女子43名）であった。

## イ 生徒の実態

奈良県立高取国際高校は国際英語科、国際コミュニケーション科、国際文化科の3科からなる高等学校である。アメリカ、フランス、オーストラリアに姉妹校があり、2年に1度、各姉妹校への短期留学生の派遣と受入を実施している。さらに長期の留学生の受入など国際交流活動が広く行われている。また、入学してくる生徒の外国語に対する関心が高い。2010年9月現在で国際英語科の第2学年においては、英検2級1名、準2級9名、3級16名が合格し、2週間以上の英語圏への短期留学経験者は11名を数える。

## ウ 実施手順

最初にリーディングを中心とした英語に関する事前アンケートを行った。同時にpre-testを実施し、読解速度と読解効率を測定した。次に速読の重要性を説明し、速読をする際には返り読み、検索読み、概略読み、音読、辞書を引くことはしないことを確認した。それから文頭より意味単位ごとに理解する手法としてスラッシュ・リーディングについての授業を2回行い、スラッシュを入れる位置を学習した。その後、毎授業の最初の約10分間を利用して、投げ込み教材としてスラッシュを入れた英文を読む速読練習を16回実施した。速読練習の際には英文を読む時間を測定し、時間記入後に内容の理解度を調べるために裏面に印刷された設問（True or Falseテスト5問）に答えさせた。16回の速読練習終了後にpost-testを実施し、その後意識の変化を調べるために速読指導についての事後アンケートを行った。

## エ 実施期間

第1回目の速読練習は9月中旬に実施、学校行事、国民の休日、定期考査等の関係からほぼ週2回の割合で、約2か月の間に16回の速読練習を実施した。

## オ 速読教材

### (7) リーダビリティ

リーダビリティとはテキストの読みやすさの客観的指標で、テキストを選ぶ際に一つの基準として使用される。最もよく利用される公式にFlesch Reading Ease (FRE) とFlesch-Kincaid Grade Level (GL)がある。Microsoft Wordで測定が可能で、そ

Flesch Reading Ease (Fleschの公式) $FRE = 206.835 - 0.846w1 - 1.015s1$ <p>FREは読みやすさ w1は単語の長さ（一単語あたりの平均音節数） 総音節数 ÷ 総単語数 s1は文の長さ（一文あたりの平均単語数） 総単語数 ÷ 総文数 数値が大きいほど読みやすい。 0-30（大変難しい） 30-50（難しい） 50-60（やや難しい） 60-70（標準的） 70-80（やや易しい） 80-90（易しい） 90-100（大変易しい） Flesch-Kincaid Grade Level (Flesch-Kincaid公式) <math display="block">GL = 0.39s1 + 11.8w1 - 15.59</math><p>GLはそのテキストがアメリカのどの学年に適しているかを示す。 1は1st grade（小学校1年生）、9は9th grade（中学校3年生）</p></p>
---

図3 Fleschの公式とFlesch-Kincaidの公式（清川、2000）

れぞれの公式と数値が表す難易度は図3のようになる。

### (イ) 速読教材について

安藤(1989)によると、「速読練習に適する易しい読み物の基準は①未知の語が40語につき1語以下であること、②構文が複雑でなく未知の文法事項を含まないこと、③ある程度の子備知識がある親しみの持てる内容であることの3点であり、教科書を目安とするならば、1

～2学年下の教科書を使用することが適している。」と指摘している。

これを参考にして、本研究で使用する速読教材は検定教科書英語 I (H14、H18) を用い、語数は対象となる生徒の集中力や授業最初の10分程度で速読練習を行うことを考慮して文章内の単語数を300～400語とする。リーダビリティについてはFlesch Reading EaseとFlesch-Kincaid Grade Levelを利用して測定し、FREは63.8～75.9 (平均70.0)、GLは5.1～7.3 (平均6.1) の範囲を使用し、教材の難易度の統一を図った。

## カ スラッシュの位置の指導

速読練習を実施する前に速読練習用の教材に入っているスラッシュの位置のルールについて2回(1回45分)学習機会を設けた。ルールは上記の高梨、卯城(2000)に従い、それぞれのルールを含む例文を示した。その後上部にスラッシュ入りの英文、下部に参考として意味単位ごとの日本語訳を書いたプリントを用いて文頭から意味単位ごとに読み、内容を理解する練習を行った。

## キ pre-testとpost-test

pre-testとpost-testにはスラッシュのない英語の文章を使用した。語数、FREとGLを基準としたリーダビリティ、文の種類については同条件となるように統一した。理解度を調べる設問は速読練習時と同様にTrue or Falseテスト5問とした。

## 5 研究結果と考察

### (1) 読解速度と読解効率の変化

読解速度と読解効率についてpre-testとpost-testの結果を比較し、対象者73名のwpmの数値の変化を調べた。表1、図4に示したように、平均値で読解速度は13.1wpm、読解効率は15.8wpmの伸びが認められた。post-testの読解速度が向上した生徒は74%(30wpm以上向上した生徒は23%)であった。読解効率が向上した生徒は70%(30wpm以上向上した生徒は32%)であった。またpost-testにおいて読解速度が100wpmを超えた生徒は40%(pre-testは16%)、読解効率が100wpmを超えた生徒は25%(pre-testは5%)であった。なお、pre-testとpost-testの読解速度、読解効率の差の正規性を検定すると、P値による判定で、読解速度はP値=0.3138、読解効率はP値=0.4407となり、正規分布に従っていることが確認できた。したがって、二つのテストの平均値の差を統計的に分析するために対応するt検定を実施したところ、読解速度は $P=9.997 \times 10^{-8}$ 、

表1 pre-testとpost-testの結果比較

	pre-test	post-test
単語数	327	327
FRE	74.2	72.3
GL	5.5	5.5
文の種類	物語	物語
平均時間(秒)	247.4	213.1
平均読解速度(wpm)	83.1	96.2
平均正答率(%)	75.3	80.5
平均読解効率(wpm)	62.7	78.5

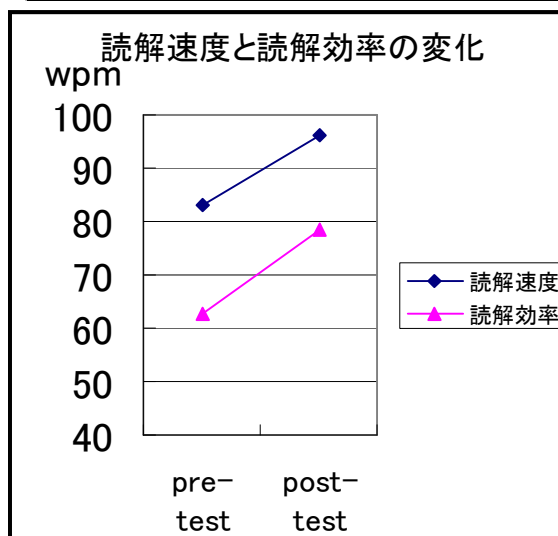


図4 読解速度と読解効率の変化

読解効率は $P=4.712 \times 10^{-5}$ となり、ともに有意差が確認された。

こうした結果から仮説1については、スラッシュ・リーディングを用いた速読練習が文頭から意味単位ごとに理解する訓練となり、読解速度と読解効率を向上させ、今回の速読指導のような2か月間で16回の短時間、短期間の練習であっても、十分に効果が期待できることを示している。

## (2) 速読練習結果

速読練習の教材は語数やリーダビリティにおいてできる限り同等のものを使用しようと試みたが、一定にすることは難しく、上記のような範囲となった。生徒がより速読練習に取り組みやすいようにFREを基準に第1回から第16回にかけて易しい教材から使用した。16回実施した速読練習の結果は表2、図5のようになった。速読練習

表2 速読練習の教材データと結果

	語数	FRE	GL	文章の種類	平均時間 (秒)	平均読解速度 (wpm)	平均正答率 (%)	平均読解効率 (wpm)
第1回	364	75.9	5.1	説明文	274.6	84.4	67.5	56.4
第2回	366	74.5	5.5	説明文	292.1	79.2	67.5	52.9
第3回	323	72.2	6.0	説明文	241.2	84.9	70.4	61.1
第4回	400	71.9	5.8	説明文	274.7	91.1	83.3	77.1
第5回	333	71.6	5.5	説明文	246.2	84.6	63.7	55.2
第6回	301	70.9	5.3	物語	221.9	85.6	62.6	54.2
第7回	369	70.2	6.4	説明文	268.1	86.4	73.1	63.4
第8回	311	70.1	6.2	説明文	229.0	85.5	64.4	55.4
第9回	344	69.9	6.0	説明文	232.5	94.3	72.3	68.6
第10回	358	69.7	6.4	物語	246.8	89.7	75.0	68.1
第11回	388	69.6	6.2	物語	266.6	91.1	61.1	56.5
第12回	341	69.6	6.5	説明文	245.3	88.7	60.9	54.7
第13回	353	67.0	6.2	説明文	258.0	85.9	62.6	53.7
第14回	384	66.5	7.3	説明文	259.6	92.2	62.0	57.4
第15回	348	66.0	6.9	説明文	243.1	88.6	65.9	59.3
第16回	387	63.8	6.6	物語	258.7	94.5	74.6	69.9
平均	354.4	70.0	6.1		253.7	87.9	67.9	60.2
最小	301	63.8	5.1		221.9	79.2	60.9	52.9
最大	400	75.9	7.3		292.1	94.5	83.3	77.1

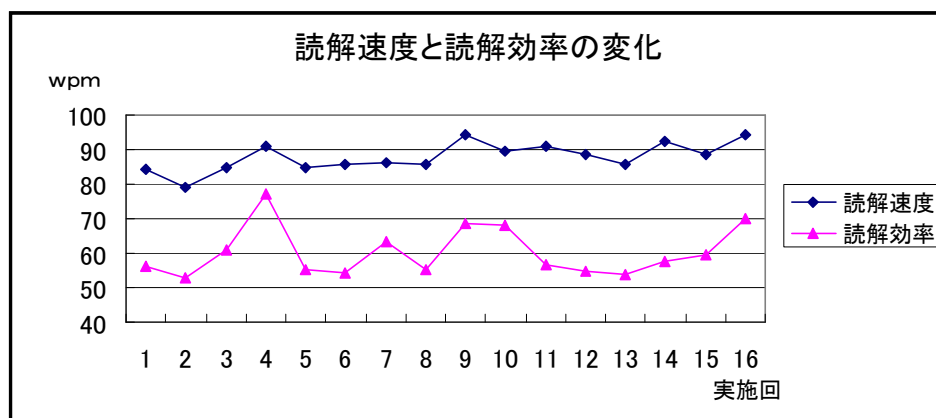


図5 速読練習における読解速度と読解効率の変化

においては読解速度と読解効率は回を追うごとに顕著な伸びを示す形には至らなかった。しかしながら、第1回から難易度が増すように教材が並んでいたことを考慮すると、図4の折れ線グラフの状況から読解速度は徐々に向上していったと考えられる。一方、読解効率は設問の正答率による影響から変動が大きく、明確な傾向を示さなかった。速読練習における内容の理解度にはかなりのばらつきがあった。

### (3) 帰国生、留学生の結果

参考までに分析データの対象から除外した帰国生と留学生の結果をここで挙げてみたい。16回の速読練習の結果を比較すると、対象生徒の読解速度、正答率、読解効率の平均が87.9 wpm、67.9%、60.2wpmであるのに対して、帰国生は平均で173.3wpm、76.0%、131.5wpm、留学生は364.4wpm、93.8%、340.8wpmとはるかに上回る数値を記録した。

帰国生は中学3年間をアメリカの学校で学んだ。日常生活の中で豊富に英語に接する機会があったと思われる。留学生はインドネシア出身である。インドネシア語は英語と同じく主語＋動詞＋目的語の語順をとる。英語に対する関心が高く、英語の原書を読む習慣があり、自国では学校教育以外でも英語を学んでいた。

この二つのデータから読解速度と読解効率の大幅な向上には英語に接する量を増やす必要性があると考えられる。

### (4) 意識の変化

本研究の対象者である国際英語科第2学年の生徒にpre-test前に事前アンケートを実施し、次のような結果を得た。70%を超える生徒が「英語の学習が好き。」、「英語が得意である。」と答えている。しかしながら、75%の生徒が「英語の長文の内容を理解することが苦手である。」と回答し、図6が示すように「長文を読むことに抵抗感がある。」という回答は74%である。さらに「授業以外で英語の文章を読む機会が多い。」、「英語の文章を読むのが速い。」と答えた生徒は全体の4分の1程度である。post-test後にも事後アンケートを実施し、最終的な分析データの対象である73名から次のような結果を得た。89%の生徒が「スラッシュ・リーディングは役立つ。」と答え、90%を超える生徒が「以前（速読練習前）に比べて、英語の文章を読むのが楽になった。」、「英語の文章を読むのが速くなった。」、「英語の文章の内容が理解できるようになった。」、「単語の意味が予測できるようになった。」、「それぞれの英文の意味が理解できるようになった。」と肯定的な返答をしている。また図7が示すように、「以前（速読練習前）に比べて英語の長文を読むことに抵抗感がなくなりましたか。」という質問に対して、

「なくなった。」もしくは「どちらかといえばなくなった。」と肯定的な答えは92%であった。しかしながら、「速読練習の授業が楽しかった。」、「授業以外にも英語の文章を読むことに挑戦しようと思う。」と答えた生徒は60%あまりにとどまった。「英語力が向上したと思う。」と答えた生徒は77%であった。このことから、多くの生徒はスラッシュ・リーディングの有益性、スラッシュ・リーディングによる速読力、内容の理解力、単語の類推力、英語力の向上を実感したと言える。

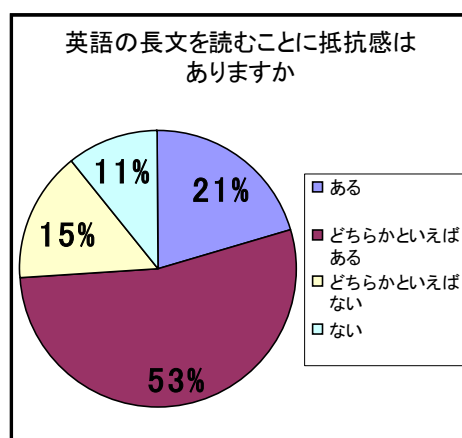


図6 事前アンケート結果（問7）

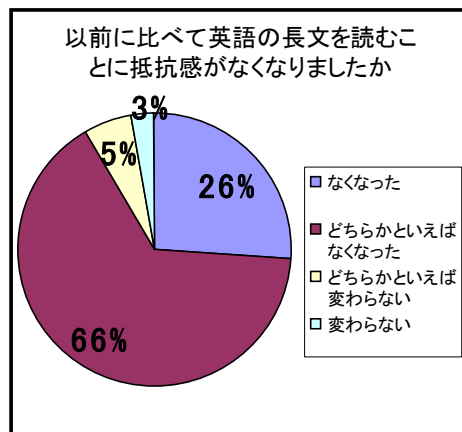


図7 事後アンケート結果（問9）



事前アンケートによれば、74%の生徒が多少なりとも英語の長文を読むことに抵抗感をもっていた。しかしながら、事後アンケートにおいては「以前（速読練習前）に比べて英語の長文を読むことに抵抗感がなくなった。」と答えた生徒は92%であった。仮説2について、スラッシュ・リーディングによる速読練習が英語の長文を読むことに対する抵抗感を減少させたと考えられる。この要因は文頭から意味単位ごとに理解することに慣れ、長い文も含めてそれぞれの英文の意味理解が容易になり、さらには文章の内容理解が進んだと言える。またNuttallの循環から考えると、内容理解が進んだこととともに、読む速度が向上したことが読む楽しさが増す良い循環に導き、英語の長文を読むことの抵抗感を減少させたとも言える。

## 6 今後の課題

pre-testとpost-testの結果を比較すると、スラッシュ・リーディングを用いた速読練習により読解速度と読解効率に効果があることは実証できたが、大幅な数値（wpm）の向上には至らなかった。この原因一つは、意味単位の考えを固めるスラッシュ位置についての授業が2回では不十分であったということが挙げられる。事後アンケートの感想欄にスラッシュの入る位置が理解できていないというコメントが数人見られた。もう一つは速読練習の回数の不足が考えられる。読解速度と読解効率の大幅な向上には長期的な視点で取り組む必要がある。速読練習の回数を増やすためには語数や難易度がある程度一定で、内容がまとまっている教材を見つけることも課題の1つとなる。また事後アンケートから、実際今回の教材では未知語の割合が安藤(1989)の「易しい文」の基準である40語につき1語以下、高梨(1995)の英文の意味がおおよそ理解できるとする5%（20語につき1語）以下よりも高かった生徒も存在したと思われる。読解効率は設問の正答率にかなり左右されたが、設問のレベルを一定にすることも研究結果の信頼性を高めるための課題である。post-testにおける読解速度は平均96.2wpm、読解効率は78.5wpmであった。これは日本人高校生が目標とする読解速度150wpmと、60～70%を理解度とした読解効率90～105wpmとはまだ大きな隔たりがある。今後更にこの差を埋める速読指導の研究を深めたい。

## 参考・引用文献

- (1) 文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領』文部科学省 pp. 110-116
- (2) 門田修平・野呂忠司・氏木道人（編著）（2010）『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店 pp. 52-62 pp. 185-244 pp. 300-314
- (3) 岩城禮三（1980）「精読と速読」『英語教育』9月号 大修館書店 pp. 21-23
- (4) 谷口賢一郎（1992）『英語ニューリーディング』大修館書店 pp. 191-209
- (5) 山内豊（1985）「中学生における速読指導の試み」『関東甲信越英語教育学会研究紀要』第1巻 pp. 11-25
- (6) 藤枝宏壽（1986）「大学生と英語速読力習得の実態と問題点」『福井医科大学一般教育紀要』第6巻 pp. 1-25
- (7) 駒場利男（1992）「パソコンによるコミュニケーションのためのリーディング指導」『STEP BULLETIN vol.4』 pp. 88-107
- (8) 高梨庸雄・卯城祐司（編）（2000）『英語リーディング事典』研究社出版 pp. 41-72

pp. 289-298

- (9) Nuttall, C. (1996) 'Teaching reading skills in a foreign language' pp.127-128
- (10) 高梨芳郎 (1995) 「データで読む英語教育の常識」『現代英語教育』6月号 研究社出版  
pp. 50-51
- (11) 高梨庸雄・卯城祐司 (編) (2000) 『英語リーディング事典』研究社出版 pp. 29-40
- (12) 安藤昭一 (1989) 「やさしい文を速く読む指導」『英語教育』7月号 大修館書店  
pp. 14-15
- (13) 佐野正之 (編著) (1999) 『はじめてのアクションリサーチ 英語の授業を改善するために』大修館書店
- (14) 柳井久江 (1998) 『4 S t e p s エクセル統計』オーエムエス出版